慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	陽明文庫蔵「道書類」の紹介（一）『雲居月双紙』翻刻・略解題
Sub Title	
Author	恋田, 知子(Koida, Tomoko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2007
Jtitle	三田國文 No.45 (2007. 9) ,p.79- 92
JaLC DOI	10.14991/002.20070900-0079
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20070900-0079

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

陽明文庫蔵「道書類」の紹介（一）
『雲居月双紙』翻刻・略解題

恋田知子

近衛家伝来の貴重な典籍を収蔵する陽明文庫に、「道書類」と称される書物群がある。仮名法語を中心に、あわせて十八種類の書物が一括して収められており、慶長・元和年間（一五九六―一六二四）の奥書を有するものが含まれていることや、とりたてて書写時期の異なるものも見えないことなどから、おそらく同じ時期に書写された写本群であると推察される。ただし、それら十八種の書物が「道書類」として一括された時期などについては判然としない。

この「道書類」については、これまでほとんど顧みられることがなかったが、『仏国禅師法語』や『法然上人念仏教化詞』、『大灯国師法語』のほか、題目のない仮名法語とおぼしき書物がある一方、『幻中草打画』[1]などの物語草子の類も含まれている点で注目すべきものがある。近衛家という貴族文化圏における、宗教的言談の享受のありようを考える上で、また、ジャンルとしての仮名法語やお伽草子の重なり方を見る上でも、きわめて有意義な書物群であるといえるだろう。「道書類」の意義、および各書については、今後とも稿を重ねて検討していく予定ではあるが、なかでもとくに伝本が少なく、貴重であると判断される書物について、「陽明文庫蔵「道書類」の紹介」として、順次、全文を翻刻・紹介していきたい。

今回紹介する『雲居月双紙』は、他に所在を聞かない一書であり、その内容、および跋文等から、天台真盛宗の開祖である真盛上人（一四四三―九五）に深く帰依した尊盛法親王（一四七二―一五〇四）の逝去を悼み、真盛の弟子であり、西教寺第二世の盛全（一四四九―一五〇五）が、文亀四年（一五〇四）に制作した草子の転写本と判断される。本書についての詳しい考察は、別稿[2]を参照されたい。書誌については、以下のとおりである。

・函架番号　近ト―七二―ニ
・形態　写本。上下二冊。仮綴じ。
・寸法　上冊…縦二八・二糎。横二〇・四糎。下冊…縦二八・八糎。横二二・八糎。
・表紙　本文表紙共紙。楮交じり斐紙（上下冊で料紙・筆が異なるか）。中央打付墨書「雲居月双紙上（下）」（各冊の本文と同筆）。
・丁数　上冊…墨付十八丁。下冊…墨付十六丁。
・本文　半葉八～十行。漢字平仮名交じり。朱書きで、振

り仮名や訓点等を付す。

・内題　「雲居月双紙」

・本奥書「文亀四甲子三月十七日盛全書之」[3]

・印記　上下冊とも巻首に「陽明蔵」の朱額形印あり。

翻刻に際して、本文は底本に忠実を期したが、私に句読点を打ち、読解の便宜をはかった。なお、虫損等により判読不能の箇所については「□」としたが、文字が推測できる箇所については、（　）内に傍記した。

注

（1）拙稿「説法・法談のヲコ絵―『幻中草打画』の諸本―」（『仏と女の室町―物語草子論―』笠間書院　二〇〇七年近刊）。

（2）拙稿「室町期の往生伝と草子―真盛上人伝関連新出資料をめぐって―」（『唱導文学研究』第六集　三弥井書店　二〇〇七年近刊）。

（3）『雲居月双紙』奥書を一見すると、「盛全」は「成譽」とも読めるが、前掲注(2)において、跋文や周辺資料を検討した結果、上善寺で『往生要集』談義をおこない、尊盛法親王との和歌の贈答をしうる人物としては、盛全がもっともふさわしいことなどから「盛全」と読んだ。

【附記】
本書の閲覧ならび翻刻の御許可を賜りました、財団法人陽明文庫に深く感謝申し上げます。また、本書の翻刻・考察に際しまして、御教示賜りました、陽明文庫長名和修先生、天台真盛宗宗学研究所所長西村冏紹師に、心より御礼申し上げます。なお、本稿は、科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

【翻刻】

雲居月双紙上　」（表紙）

雲居月双紙

あはれなるかなや、諸行無常のことわりは、一人も
のかれぬみちとしりながらも、けにおとろく心は
すこしもおこりかたく、生者必滅のさためなき
世とくちにはいへとも、たれとても後世をなけく□(物)
まれにこそ見え侍りけれ。たまくね□□なる人も、
こけなるはおほく、しんしちあるはすくなし。されは
浄土をねかひて念仏せん人は、ゆかしと五欲に　」（1オ）
貪する思ひをやめて、きらくに無常を
観する心をはけまし、おこたらす佛名を
となへ給ふへし。止観にいふかことく、無常□(の)
殺鬼は豪賢をもゑらはす、琰魔の獄卒は
皇妃にもなさけをおもはす、つみにまかせて
呵責すといへり。又大集経云、
妻子珎寶及王位。臨命終時不随者。
唯戒及施不放逸。今世後世為伴侶。　」（1ウ）
まことにおろかなるかなや、庫蔵みつる財寶も、
たゝ一世の身をやしなふたからなり。まつたく
冥途のくるしみをすくる事あたはす。
たとひ天下をふさぬる高官も、地獄のせめを
つくのうことなし。しかし、道心をおこして佛□(界)□(を)
もとむるにすくる事あるへからす。人のいのちの
あやうき事、風のまへのとほし火、この身のきえ

やすき事、草葉の露よりもあはれなるためし、」（2オ）
目に見、みゝにきく事、いくそはくそや、かなしきかなや、
いくほともなきあたし世に、しはしけすらふ妻子の、
色に心をとゝめて、春の花のさかへをうらやみ、夏の
月のまゆすみをなかめ、秋の霜の弓箭（キウセン）をに□
たえて、はけしき冬の夜の白雪のかうへを
はらはすして、利欲にふけりて四方に馳走（チツウ）し、
名利にかゝへられて日夜に経營（ケイエイシ）し、炎天（エンテン）にあけを
のこひ、嚴寒（ケンカン）にこほりをしのくのみにあらす。つゐに」（2ウ）
せうねつのほのをにむせひ、紅蓮のそこに
しつみなん事、おろかなる心のとかにはあらすや。
さしも梵天三銖のいとすちよりも、
まれなる人身をうしなひて、又俱生神の
罪帳にしるされん事は、殺生十悪のつみに
よる物也。はやく一たんの名利をいとひ、三業
清淨の道心をおこして、三帰五戒の
佛教を信して、一行三昧の念仏をとなへ給ふへし。」（3オ）
しかのことく道心をおこし、念仏ありしに
よりて、臨終正念に往生極樂の素懐を
とけまして、御ありさまをきゝて、後世を
ねかはん人はたれとても、かくこそあらまほしき
事と思ひよるしるしに、つたなき筆のあとを
のこし侍る也。
抑、人王一百五代の帝のちのつちみかとのいん（後土御門院）第二の
皇子にておはしましけるを、山門の座主
青蓮院とのゝ御付弟にそすゑ申されける。」（3ウ）
すなはち御諱を尊傳と申たてまつる。
天性聰敏のほまれ、他にことに行学の智鋒（チホウ）、
世にすくれさせ給ひしかは、天台止観に眼をさらし、
真言瑜伽の深秘をうかゝひ、四度潅頂の
壇上道場観のうちに、忽に不動明王來現
し給ひて、加持護念の證明をかうふり給へり
といへり。されは、末の世には、たくひすくなき
碩徳ともあほかれ給ふへしとそ申あひける。」（4オ）
こゝに時めき給ふ、念仏弘通のひしりあり。
これは、北嶺西塔の住侶に智善院真盛と
いふ人也。しかるに、宿善のもよをしけるにや。
名聞勝他の災衆をのかれ、このたひ出離の
要道をいのる事とし久（ヒサシ）し。ある夜、十禅師
に参詣するに、社人とおほしき物のいふ様は、
我名はつふえと云物也。汝にくすりをあたふ
へしといふに、くちをひらき、のむと覚え」（4ウ）
けれは、行かたしらす、うせにけり。その時よりも
無上道心をおこし、くろ谷に篭居して
経蔵にいり、なはをくひにかけて、ねふりをの
そき、一切経を披閲（ヒエツ）し給ふ事、一千日の
間也。祖（ホ）釈迦一代の教法をうかゝひ、弥陁本
願の大悲をまなひ、恵心所作の往生要集
を講談し給ふに、道俗男女さかりなるいちの
ことく群集するにあるいは妻子をすてゝかみをそり」（5オ）

あるいは古郷をさりて出家する僧尼等は、
幾千万とかすふるにいとまあらす。これにより
りて、諸宗の学侶道心をおこして、念仏
する事は、法然上人の出世にもひとしかりけ
れは、世人の諺にも、大道心者いま法然の
真盛上人とそ申ける。彼化導を信順しまし
まして、厭離穢土の道心をおこし、欣求浄
土の宗門に入せ給ひて、即上人の弟子と御成
あり。御戒名を尊盛とつけ申され、御院号
をは不遠院とそあらためられける。これすなはち、
三心發得の心水ニ、去此不遠の天月を拝し、
十念成就の合掌ハ、三尊来迎の花臺に乗し
給はん。師資相承のしるしとそおほしめし
ける。されは、土御門院様に御信心甚深おはしますにより、
慈覚大師御作のあみた仏を付属申されけるに、
上人入滅之後は、この御持尊を不遠院二宮様
にそ、あつけさ□□□(あ)りける。常にこの
木像の本尊を、真盛上人のかたみと恭敬
礼拝ありて、御念仏あるによりて、上人の弟子
□僧尼には御對面ありて、十念を御さつけあり。
此門徒、不断念仏所々の道場、繁昌す□
ことを随喜ましますに、いよ〳〵止悪念佛
の御教化、ありかたくあかめ奉るに、御手跡の
各号を申うけ、諸国念仏堂にかけたて
まつり、一佛浄土の値遇あさからす、御たのもしく」(6ウ)

申あひけるに、かりそめに、去年の秋の
ころよりも、御不例のよし、ほのかにきこへ
けるか、老少不定の有待の依身の
かなしさは、つゐにさんぬる文亀四(甲子)
正月廿七日(己酉)にそ御遷化ありける。此
よし、千本の上善寺よりも注進ありしに
おとろきて、かもの常念寺よりもまかり
しのち、二月三日の日没の時分に、伏見の
般舟院へ参節しけるに、佛殿の南の廊」(7オ)
一間のうちに、はや御棺におさまり給ひける。
御そはには、嵯峨の二尊院の長老香衣を
着してそおはしける。屏風のまへなる机の
香呂に焼香をいたし、念仏をはしむる□、
不覚のなみた双眼にあまり、墨衣の袂
をそしほりける。およそ人間八苦の中に
も、ことに忍かたきは、二たひあひみぬ愛別
離苦のなかきわかれほと、かなしき事あるへからす。」(7ウ)
六道生死のちまた、三界輪廻の火宅もうら
めしくおほへ、さてもつゝかなく御現存におはし
まさは、いかはかり哀愍覆護の御なさけを
かうふり、教誡憐引の芳詞にあつかるへき物を
と、いまさら媚客の尊顔思ひいたされ□、
□(心)肝に銘し、愁涙おさへかたく、心中に往生
□讃の文を思ひいたして、廻向申ける。
畢レ命乗レ臺出ニ六塵一慶哉難レ逢今得遇一永生(證)無為法性身」(8オ)

□の上花の臺にすむ月のかくるゝ山の物そ恋しき
□□□りふし、いりあひのきこえけれは、
□□よりもなみたにくれし無人は伏見の里に入合のかね
となみたとともに夜をあかしけるに、久しく奉□
申されける統温（トウヲン）と云老僧の○申（かたり）さるゝ様は、
宮様、正月廿五日よりも病悩おもらせ給ひけれは、
御臨終の御覚悟とおほしくして、一切男女の参
勤をやめさせられ、御病床には両三人の僧衆
におほせつけ、稱名念仏の浄業を修しめ、
御自筆に諸経の要文をあそはし、御障
子におさせられ、念仏のひまに御となへあり
けるに、病苦しきりにせむるときは、いよ〳〵
南無阿弥陀仏〳〵と御申ありしか、上善寺の
住持盛信をめして、臨終すゝむへきよし、おほ□
□□て、彼慈覚大師の阿弥陀仏にむかひ
□□く御末後には、六七返御念仏ありて
□眼（開）ありけりとて、御開眼のゝち、面貌
□勝に相好たかふ事なし。聖衆来迎の
□□ありかたくそ見えける。御病中に
得生庵をめし、愚僧の御尋のありける、ま事に
無慚無愧の身なからも、此尊師に値遇し
奉る御遺言むなしからすは、終焉の□（ケ）には、
必佛尊聖衆の御引接たのもしくそ覚え
ける。同四日の早朝には、先帝様の御廟
所にて、念仏一座廻向いたし、なく〳〵

」（8ウ）

」（9オ）

」（9ウ）

伏見の里をいてゝ、宇治の平等院の
門前に一宿して、かもの常念寺に於て
かくの如く御中陰をむすひ、同十一日には
二七日の御忌日にあたりしかは、圓頓戒を
おこなひて、御追善にそ廻向申ける。
いか□西蓮寺、真盛上人の御廟所の山の
□に、あたらしく墳墓をつかせ、御石塔をそ
□られける。其時、御病中にて遊
はしける要文を、得生庵よりもくたされ
けるに、感嘆にたえすしるし侍る也。

」（10オ）

」（10ウ）

永觀律師云、
病ハ是レ真善知識也。我依二辛苦一弥厭二浮生一、深
欣二浄刹一。
善導大師云、
纔三有二病患一者、莫レ論二軽重一。但念二無常一
□心可レ待レ死一。
□先徳道哥
仏に□心もならす身ならすたゝ其まゝに奥つしら浪
あみた仏と唱る聲や時為よふかとすれは我名なりけり」（11オ）
弥陀たのむ心のおけの底ぬけていか程いひしつみものこらす
阿みた仏はまよひさとりの中たえてたゝ其まゝに是仏也
弥陀たのむ心は物にうつ蟬のもぬけの柄（カラ）の身こそやすけれ
汝等勿抱臭尸臥　種々不浄假名人
如得重病箭入體　衆苦通集安可眠
終時苦相如雲集　地獄猛火罪人前

忽遇往生善知識　急勧専称彼佛名
化佛菩薩尋聲到　一念傾心入寶蓮
　　」（11ウ）
　　賴吒和羅伎聲唱云
有為諸法如幻如化　三界獄縛無一可樂
王位高顯勢力自在　无常既至誰得存乎
如空中雲須臾散滅　是身虚偽
猶如芭蕉為怨為賊　不可親近如毒蛇箕
誰當愛樂是故諸　佛常呵此身
彼佛因中立弘誓　聞名念我惣來迎
不淨貧窮将富貴　不簡下智与高才
不簡多聞持淨戒　不簡破戒罪根深
但使廻心多念佛　能会瓦礫變成金
　　」（12オ）
八幡御示現云、念佛ノ安心ハ稱名ノ聲也。他力本願ハ
重罪ヲ滅ス。
よしあしと思ふ心にあらそいてねてもさめても念仏忘るな
□行しるしは又もあらはこそ南無阿みた仏と申ほかには
極樂へゆかんと思ふ心にて南無阿みた仏と云そ
　出息は入息をまたす、入息は出息をまたす、
　たすけ給へ、あみたほとけ、南無阿弥陀仏。
いそかはし迎ん程をまてしはし其日の時と定をく也
まちわひてなけくとつけよ皆人にいつをいつとていそか
　　さる覧」（12ウ）
いそけ人御法の舩のかにふときのりおくれなは
　文殊云、於ニ未来世悪衆生一称ニ念スレハ　又、
西方弥陀号依ニ佛本願一出ニ生死一以ニ直心一故ニ生ニ極樂一
如（カクノコトク）是勤修（コンシュ）ありし御心さし、真実にいつわりなく、
いのりおはしますによりて、佛の来迎にあつかり、
臨終正念に往生の本きを達し給ふ事、
むへなるかなや。觀経に、具三心者必生彼國と
いへり。此要文、道哥なと拝見して、　」（13オ）
御面影の忘やられす、其後のとほし火
□□呂にむかひ、四十八願になそらへ、色葉
の四十八字を句のかみにをきて、うたとや
□んかくはかり
色も香もたゝかりそめの露の身をなかむる人そ花のちり行
ろもかひも身はうき舟の世間をいとふ心やいたる彼岸
はかなしや見しもきゝしも過る世になをおとろかぬ我心かな
にしへ行心ちこはん日にそへて命つゝむる入合のかね」（13ウ）
ほともなくたち行月日かすふれはかへらぬ年のなみそかすなる
へんちにもむまれんことの嬉しさよ疑ありと念仏申さん
としも日もかたふくかけの老か身の後世しらて過るかなしさ
ちきりけん心はおなし蓮葉の上に消なん露の身なれは
りんしゆうの心みたれす弥陀のなをとなふる人そ佛とは成
ぬるかうちにも忘やられす面影はなみたにいつる人の言葉（コトノハ）
るりの地にうつりかゝやく幡（ハタホコ）の上に光のあり明の月
思ふ事かなはぬ世とはしりなから身のうき時は人そうらむる
かのほとけ十聲の御名のかすとても迎とらむとちかふ
　　たのもし」（14オ）
よをいとふ色はあまたにみゆれとも真の道をしる人そなき
たれとてもあたしうき身とおもへともこの世をいとふ心すゝます

蓮花とてよそにはあらす皆人のむねのうちなる心なりけり
そへてやる心の法やうけぬらんなき人とても同し命に
つゐにみなのかれぬ道といふ人もいまはの時はおとろきにけり
ねてもなを佛の御なをとなふへしなかきねふりのさめんかきりは
なき人の形見のならましかくはかり涙もよをす水茎の跡
らかんさへ佛のわかれ忍ふ世に三そち三とせの人そ
はかなき」（14ウ）
むら雲にかくるゝ月の面影は猶あかなくもしたふ夜半哉
うきことも嬉しき事も夢の世は心にかけて物はおもはし
いのち程おしきたからはなき物をあたにすてぬる人のおろかさ
後世をねかふかすにはいりぬれと法に心のなとかたまさる
おく山に身を墨染の人はあれと心のきよき法そまれなる
くりかへし思へはやすき世の中をすつる心のなとかなからん
やすからぬ此世のわさを思ふ程後世ねかふ心もたすや
まきるへき道にてなけれ弥陁の名をとなふる人は至る彼國
けふよりはねかはん物よ法の道人のあはれをみるにつけても」
（15オ）
ふくたひにあわれもよほす秋風の身にしむほとの露の命に
こそよりもすき行人のかすそひてわれも涙といつか消なん
ゐにしあれはかゝるすまゐや柴の戸の古里人にねれてそすむ
てにと□も嬉しかりけり御佛の御名をとなふるすゝの給のを
あさゆふにとふらふ法の聲きゝて心まさしくさとり□□
さりとてはたすけ給へと思ひより佛のしひのふかくこそなれ
きみゆへにうき世をいとふ墨染の袖一しほの色そまされる
ゆめの世といひはあへとも人ことに色にふけりてまよふかなしさ
目にも見よかゝみにうつる面影の有かなきかの心なりける
見るときはおとろく心ある人もやかて忘るゝ六道かな」（15ウ）
しはしたゝ思ひなくさめ色かゐでうきはのかれぬ世とはしらすや
ゐにかくも佛のすかた見る時はつみの消ぬるたからなりけり
日にそへてちかく成行後世をなけかぬ人のはてそかなしき
もしほ草浪のよるへに月いてゝ雲のかけかと小舟さす暮
せきかねてなみたにしほる心よりなき面かけを袖そとゝむる
すき□けてちきりし人の先立てのこる我身もあさかほの露
経陀羅尼念佛の聲をしるへにて行生けん弥陀の国かな
かくて、四十八字の色葉よりよろつ文字のしるへと
なる様に四十八願に一切念仏の法門おさまるなり。」（16オ）
阿弥陁ほとけ四十八願と云は、南無阿弥陁仏と
我名号をとなへん人を、我國に生れしめんとちかひ
給へし。この故に、善導大師に四十八願の心を
四十八字につゝめて釈し給へり。其文かいわく、
若ヲ我レ成佛センニ十方ノ衆生　称フコトニ我名号一下至十聲
若　不レ生者不レ取二正覺一　彼佛今現在世成佛重願不虚
當レ知本誓ノ重願不レ虚　衆生称念必得往生
」（16ウ）
法然上人、念仏行者すゝをてにとらん時は、
此文をとなへて、阿弥陁ほとけにうちむかひ、
よろこひをなして、念仏すへしとて也。
わたくしにいわく、
ともすれはうたかはしけれとも
称我名号下至十聲若不生者不取正覚
□のやくそくを思ふ朝には、いよく本願のたのもしきに、

となへらるゝは名号也。かほとあたなる命なれとも」（17オ）
當知本誓重願不虛衆生称念必得往生
佛の来迎を忍ふ夕には、いとゝ臨終の
うれしさにくちにすゝむは念仏也。
この故に、心を本願にかけてくちにおこたらす、
南無阿弥陀仏と申へき也。
かなしきかなや、十善万乗の春の花、もはや二月の嵐に
さそわれ、おしむへきかなや、卅三とせの秋月、
うき雲の定なき世のやみを照して、来迎の花臺に　」（17ウ）
乗し給りて、弥陀三尊の尊客を拝し
給へと廻向申侍る也。　」（18オ）

雲居月双紙下　」（表紙）

雲居月双紙下

人はたゝ、かしこき心ほと、今世後世の寶は
あるへからす。其かしこき道あまたありとも、
道心をおこして、後世をたすかる道にきはまるへし。
此宮様道心をおこし、御念仏ありしゆへに
臨終正念に往生し給ひしかは、いまははや三賢
十地の位にもとなり、つゐに無上佛果を證
し給はん事うたかひなくそ覚えける。當時
真盛上人の化導を信する輩、正念に
往生をとくる事、現證掌をさすか如し。
仍真盛上人御入滅は、去明應第四天乙卯
二月晦日酉刻、伊賀國あやのこほりなかたの
西蓮寺にて、往生要集の談義の折節、
いさゝか虫氣再發のよしをつけ、病床に
ふし給ひしか、今生對面いまをかきりとや
おほしめしけるにや、数輩の僧尼に
十念をさつけ、九条のけさをかけ、臨終正念に
往生し給ぬと云云。されは、其死骸
一七日間倚仔に居たてまつり、門弟の僧尼
よりはしめて、道俗男女雲霞のことく
群集して、愁涙袂をしほり、念佛する
ありさま雙林の涅槃にも類すへきにと
おほえ、身命を捨て一蓮託生を期する
僧尼等は、善導の入滅にひとしかり
ける物か、然則、遠近より往来の諸人は
さかりなる市のことし。紫雲堂上に　」（2オ）
そひき、三尊は廟松に来現し給ふと云り。
誠に濁世末代の愚悪の人も我慢偏執
の出家の輩も、眼前の奇特におとろき、
佛教の正程を信して、此上人に随て戒行を
たもち、教化をきゐて念佛する事、在世より
も滅後にいよ〳〵繁昌せり。國々所々に
不断念佛堂の立まさる事は、あに諸佛
護念のしるしにはあらすや、　」（2ウ）
誰とても後世をねかはん人は、かくこそあらまほしき
事也。無量劫にもうけかたき人身をうけた
佛道を行する人は、窮子の父の長者にあひ

て、一日に富貴の身となるかことし。われら
たま〳〵佛教にあふといへとも、懈怠不信の
輩は寶山に入りて、てをむなしくして餓死
する愚夫にことならす。たとひ轉輪王の
位をゑたりといふとも、三寶に帰依せすは、泥
梨の苦患のかるへからす。さしもいやしき
田夫野人たりといふとも、念佛に誠心あらは、
極楽に往生せん事うたがひなし。たゝほしき物は
道心なり。いつも唱へたきは念佛なり。されは、
先道心といふは、心得あり。自利利他二なり。
　道と云は三業清浄の名也。三業清浄にて
戒定恵の三学を修行して、佛道を願求するは
自利なり。大慈悲を具足して、利養にそます
四弘の誓願ををこして説法をのへ、衆生を教化
するは利他なり。此二をつらねて、上求菩提下化
衆生と云也。惣していはく、戒行清浄にして不断
念佛せん人は道心者なるへし。くわしく分別すれは、
四無量心なり。いわゆる慈无量心、悲无量心、喜无
心、捨無量心、この四無量心をくそくしたる人を道心
者とはいふへきなり。」（3ウ）
一慈無量心と云は、一切衆生を平等にあはれむ願心
をおこして、くるしみをすくふ事、病子をおもふ親
の心のことくなるをいふなり。
二悲無量心と云は、一切衆生にたのしみをさつくる願心
をおこして、我子に衣食をあたふるかことくなるをいふ也。
三喜無量心と云は、一切衆生によろこひをさつくる願心
をおこして、平等に恭敬供養する事、おやをうやまい
尊師に孝順することくなるをいふなり。
四捨無量心と云は、一切の境界に着心をすへる事を、
いふなり。されは五悪を制断する事、病者の毒薬を
忌かことし。此四のなかにはことに捨と云、文字か肝要
なり。一切ノ諸煩悩は着心より生すといへり。貪瞋二の
煩悩の中にもまつ貪と云は、此かりなる禄、身をやし」（4オ）
なはんか為に、衣食米銭とうの財寶をほしくおしく
思ふ心を財貪と云也。又妻子の愛心を初として、色
ある人を執着し戀慕する心を色貪と云也。つきに
瞋煩悩と云は、一切我心にそむく物をにくみそねむ心に
もはらのたつ心を云なり。この忿怒心は根本（ハ）心着心
よりおこれるなり。まつおやこよりも初として、したしく
むつひぬる心の着に二の妄念あり。いわゆる恩愛の
二なり。まゑにしたかひし物の恩にそむき、義に
たかふよりも愛心かへりて、憎心となる也。是を瞋煩
悩と云也。この貪瞋妄念の心をすてすは、たとひ樹
下石上に閑居をし、深山ニ只身をかはし、稲席に徳をうつむ
と云人も出離をとくへからす。名利をはなれゐる物は」（4ウ）
市の中にましはりても佛意にかなふへし。たとひ
一文不知の尼入道のともからも真実に後世をなけ
きて、念佛せん人は往生の大事をとくへし。なましひ
に黒衣に身をはなして、納衣をまとひ、頭陁を行す
といふとも、我執我悟の心ふかふして財色ニ貪求

する妄念のみに日を追り、人を参會しても人の上
よしそあしそと物かたりする事をつみとたにもかな
します、ひるはひねむすに人めをかさる名利を思ひ、
夜るはよもすから愛執を執心してねさめのきたな
さは、たゝ在家の男女よりはつみふかし。たま〳〵佛前ニ
すゝみても大いねふりに夜をあかし、念仏には物うく物
語には心よけかて我かとかをくゆる事はすくなくして」（5オ）
人のとかをもとむる心のみある僧尼は、みなこれさいけの
行なるか故に、臨終にはかならす錯乱してはちを
さらす也。誠に至誠心の行者と申は、うへたる物か食
物をもとむるかことく、いつはりなく往生極楽をねかふ心也。
我身のあさましきことをかんかへす、ましてはらのたつ
ときも煩悩のをこる時も、さりとては佛たすけ
給へと思ふこゝろり水におほるゝ物か岸の上なる人に
とりつかはやとおもふほとの心にて南無阿弥陀仏ほとけ
たすけ給へとねるにもをくるにも、臨終正念を祈
て、念佛する人をこそ真実の行者とは申けれ。
しかるに、当時の念佛者を見聞すれは、虚假名聞の
本願ほこり也。中く在家の人は真実に後世をな　」（5ウ）
けきて、慚愧の至誠心あるもあり、出家り人はわつか
なる戒智をかゝやかして、虚受信施のつみふかし。
佛前の勤行もたゝ名聞勝他の人めをかさる
心のみなり。かくのことくこけ心おほきか故に最後ニ
は大苦悩をうけて往生をとける事かなしみても
なをあまりあり。往生せさるニのみあらす。他の信
心をもさまたけて本願のあたとなる僧尼等も
あり。たとひかくのこときの人も至誠心につみをさんけし
て真実ニ浄土をねかはゝ往生をうへき也。其故は
一念發心すれは邪正掌をせすかことし。この
ゆへに、かいふんに改悔しておこたらす念佛せは往
生をゑん事うたかひなし。そのゆへはおやの心のあはれ」
（6オ）
みふかきか故に、子たにもしたかへはやかてよろこふか
ことし。佛は衆生をかなしみ給ふかゆへに一念捨邪帰
正せは佛意にかなふへし。已造業ヲ接取し給ふ也。
法事讃曰、弥陀ノ因地ニ世饒王ノ佛所ニシテ捨テレテ位ヲ出レ家ヲ。
即起テ悲智之心廣弘四十八願ヲ以佛願力五逆之與
十悪罪ニ滅テ得生謗法闡提廻心スレハ皆往ヲ。末造業抑止する也。
これよりものち、つみつくらしと發心して念仏すれは、
たとひ十悪五逆謗法闡提の人も往生する也。
　他力本願と云は、たすける人あみた仏と云事也。
阿弥陀佛の慈悲は病子をかなしむおやの心よりも
ふかきか故にたすけ給へ、南無あみた仏と申せはくすりを
のみてやまふのなをるをよろこふ父母のことし。ほとけ」
（6ウ）
すてに我名号をとなへはたすけ給ふへしといふ本
願なるか故にたすけ給へ、阿弥陀仏と申せは、
ほとけうけよろこひてたすけ給ふなり。
　くすりをのみて本服すれはおやも悦、子も悦かことし。
　念仏申て往生極樂すれはほとけの願と行者の願と

もろともに成就することわりを
願行具足機法一躰の名号なりとなつくるなり。
つねに念仏の行者は若我成佛の文を思ひいたして
衆生稱念必得往生の願力をたのむへし。もし又
念仏申にうたかひのおこらん時は阿弥陁経の若
の文を訓讀すへきなり。ことにうちふし枕を
かかふけんときは必臨○時必不顚倒即得往生の　」（7オ）
文を思ひいたすへきなり。
若有二善男子善女人一聞レ説阿弥陀佛執持二名号一若一日若七日
一心不乱専持二名号一以二称一名故諸罪消滅一即是多善根福徳
因縁一阿弥陀佛与二諸聖衆一現二在其前一是人終時心不二顚倒一
即得レ往生阿弥陀佛極樂國土一
六方如来舒レ舌證下二給フ専称二名号一至中西方上
唯恨一衆生疑不レ疑浄土對面一不相忤莫レ論二弥陀接不接一
意在二専心回不レ回一　」（7ウ）
誓行一佛語一生二安樂一不レ得悠々信二スルコトヲ　他語ヲ一
當レ知佛本誓一毫無レ謬設日月輪落二大地一
念佛必得二往生一也。
弥勒所問経、不断念佛者即得二往生一
　當云何念佛凡有二十念一何等為レ十
一者於二諸衆生一常生二慈心一不レ毀二其行一若毀二其行一終不二往生
二者於二諸衆生一常起二悲心一除二残意害意一
三者發二護法心一不レ惜二身命一於一切法不生誹謗
四者於忍辱中生決定心
五者深心清浄不レ染二利養一
六者發二一切智心一日々常念一無レ有二廢亡一
七者於二諸衆生一起二尊重心一除二我心一謙下言説
八者於二世談話一不レ生二味着一
九者近二於覚意一深起二種々善根因縁一　」（8オ）
十者正念觀レ佛除二去諸想一
この十念ひろしといへとも、慈悲に住して人よき
心をたしなみ、往生極楽の一大事をねかひいれてさ
のみ世間の物語をせすしてねふりをのそき、夜る
ひるおこたらす念佛すへしと云事也。およそ釈迦
一代の説法深廣なりといへとも止善と行善との
二なり。止悪は禁忌のことし。行善は眼薬のことし。
故に三業の悪障をやめて除て三悪道の苦を
のかれ、六字の名号をとなへて九品蓮臺に生す
へし。念佛の行者は往生をとけさる物二人あるへし。
つみつくる人の念仏をうたかふは病者のくすりをきら
ふかことし。これ邪見なり。又念佛申といひてつみを
このむ物はくすりをのみてのちかさねてとくをのむか」（8ウ）
ことし。是邪見也。
此二の邪見の人は往生しかたし。向阿のいわく、造悪
におゐてとかなしといふ思ひに住せん人はたとひ念仏
すといふとも往生すへからす。これ邪見なるか故に
といへり。されはつみをやめさるときもくいかなしみて
つみをつくらしと思ひなからもつくるつみはさんけの心
ありて念仏するか故に、氷にふる雪のきゆるかことく
滅罪すへし。もし又つみつくるともくるしからすとは

放逸の心あれは氷の上にはすこしの雪もたまるかことく
つみ日々夜々にかさなるへし。かいふんにつかしまんに歴縁
對境の妄念はゆるさるへし。心のそこよりもふかくたゝ
む所の造意對の貪瞋は往生のさはり也。故に止悪　」（9オ）
念佛の人は臨終正念に往生をうる也。憍慢怠（懈）○の者は
最後には顚倒錯乱する也。他人の言語にはよらすして
自よく思量すへきなり。　」（9ウ）

止悪念佛　安心

南無阿弥陀佛ととなふれは、八百万劫の罪障を消滅
する無三功徳の名号也と雖もうたかふ人は往生しかた
き事、たとへは千夜いつる月も雲おほふときはせん
なし。一夜いつる月も雲はれぬれは、水にやとるかこと
く、千日申念仏も疑のあるほとは本願にもれるへし。
一聲申念佛もうたかひなけれは往生すへしと経
釈分明なり。よりて他力本願と云も別の子細なし。妄
念ありなから申念仏にて、摂取不捨の利益にあつかる
へしと云事也。又病者のくすりをのみて本服する
のことく散乱の凡夫も念仏申せは、往生極楽の大利
をうる也。但くすりをのみてのちかさねて毒をのむ人は
あやまり也。念佛申といひて心にまかせてつみをつく
るは邪見なり。極重の悪人も念仏する故に
下品下生にはうまれすとも、十二大劫蓮華ひら
かすと觀経にとけり。善知識のすゝめにより
臨終十念の功徳をもて浄土には得生すれともつみ
」（10オ）

のあまり有か故に、極楽の中までもなを花合のさわ
りある也。是故にかいふんに悪をやめて真実に往生
の一大事をねかひ、晝夜におこたらす念仏せん人は
臨終にはかならす上品上生の来迎を得て即見佛（テスナワチ）
聞法のさとりをひらくへき也。　」（10ウ）

往生要集大意者攝（トハ）二此文一

大菩提○護（心）二三業一ヲ　深心至誠（ニニ）常念佛（スレハ）

隨レ願決定生二極樂一　況復具（ヲヤ）二餘（ノ）諸妙行一ヲ

護三業者　有四戒行所謂（身手口意）

身（ニハ）不レ作二淫欲一ヲ　常着（ニヨ）三衣鉢（ヲ）

手（ニハ）不レ作二殺盗一ヲ　常持（ニヨ）念珠等（ヲ）

口（ニハ）不レ説二讃毀一ヲ　常唱（ニヨ）佛（ノ）名号一ヲ

意（ニハ）觀二無常我一ヲ　常願（ニヨ）生事（コトヲ）一　極樂（ニ）

一不断念佛堂の僧尼等行儀事

堅固二五戒をたもちて非時食をたち、一滴もさけ
のます。晝夜に帯とかす。衣をはなさす。請用は
一菜一菓等也。初夜より（夜半まで）○夜半より震朝（まで）○々々（より）○頭陀を行
し、一（ヒルハ）時各番の念佛なり。
一夜佛前へ番の時はねふりをのそきて念仏申へし。又
伏所にては一切物かたりせす。ことに人のうはさをいわす。
夜るのねさめに色欲をおもはすして、ほとけの相好を
くわん念してにすゝをはなさす。かるかゆへに不浄のはたへ
をいろはさるか故にあかつきをきにも手水つかはぬ也。」
（11ウ）

一一菜一菓なりとも人の施をうけん時は、毎衆に

十念あるへし。
一庫裡にて火にあたり、伏所にて用を弁する時も
そのまゝ心にまかせて念佛ふさたする事なかれ。ゆ
たんなく佛前へまいるへし。たとひ当番にあらす
とも細々御堂へすゝむへき也。
一小事のことに身をくるしみて大事の念佛をおこた
る事なかれ。又わたくしにも大事と思ひよらん事をは、
をえなきやうに知音の人とよくく談合すへし。　」（12オ）
よろつのわさに俄にはいまふ事なかれ。善事
にも動轉すれは、魔障定心をもて正法となつく。
一いつもいそくへき事は佛前のとうち死骸の沐
浴、荼毘のとふらひ、別請の時の伴と也。
一檀方へも行人と参會の時、世間の事をとふとても
そと返事をして、さのみ世事をかたらされ。それも又
後世をねかふといへはとてけしからぬ様かたりなしてな
にともして後世菩提心をおこすやうにいかなすへし。
さうたん久しけれは念仏うすくなる也。往生の一大事
一両えかたるへし。座敷久しくす、餘事になそら　」（12ウ）
へてまかりたつへし。
一物語あらんに、いかに心やすしといふとも當座に
無人の毀誉する事なかれ。我わさほとゝおもはね
とも人の恨をうくる事也。
一僧尼たしなみたき事。としの老たる人をはさし
たる徳なしといふともかろしむる事なかれ。うやま
ふ心をもつへきなり。又としわかき比丘尼女房
阿弥小児にたいし、さのみなれくしき風情みく
るしきなり。又食物の物かたり燻火の雑音見
くるしきなり。心得給ふへき也。
一心やすき中なりといふともさのみ用をいふ事　」（13オ）
なかれ。老たる人も徳ある人も衆にましわりては
我身をかるくとまめにたちて、人をめしつかふ
事なかれ。又心ある人はさやうにたしなむ人には
用をもきく物なり。我こそふりに見ゆるれは、取
そたてぬる弟子うへきにしたかはす。いはんやよ
の人はきらふ物なり。
一頭陁と請用と遠行と他宿をは伴を具へき
也。一人行へからす。此律儀也。僧尼のひとりあり
きせんは破戒の基也。故にかりにも二人同道
すへき事也。　」（13ウ）
一寺邊在家したしきたんなの所にて細々
休息し用事をさのみいふへからす。
一不断念佛堂の僧尼、よその霊佛霊社人
参詣参篭は無益也。至誠心の行者をは
既六尊の如来守護し給ふととける。無三功
徳の弥陁の名号をかろしめて、他仏神人夫
いらはうけ悦給ふへからす。たゝ雑行の人なるへし。
一僧尼の破戒におゐては、衆儀をへて談合を
いたし、成敗すへし。又僧尼の訴訟をきゐてや　」（14オ）
かて是非をはんする事なかれ。しかるへき仁にも
不足言のたかき事ある也。

一あやまりありと人にあつかはれん同朋をは其人
機嫌のよき時に余人のきかぬ所にて教訓す
へし。もし承引なきとてさからふ事なかれ。
他人他所にてそしる事なかれ。
一道心者は用事おほきかさはりなり。よき事も
過分をはあやしむへきなり。よろつの事に
たらぬ事は後のくすりなり。あまりによき事
かさならは火滅せんとてひかりますと云事と
おもひつゝしむへき也。
此双紙を御覧せん人は、必不遠院殿尊儀
出離生死往生　極楽無上佛果
同生浄土と唱へて十念あるへき也。
」（14ウ）

雲居月双紙　下
此双紙を雲居の月と名付る事は
去文亀元晩氣九月十六日のはんけいに、
いかの國分寺にて別時念仏ありし時、
後土御門院様御服にて縫し御袈裟を
下賜けるによりて、同九月廿日に上洛せ被シ
不遠院殿様へまいりけるに、御對面ありけるに、
往生要集一座御所望により講談申ける。
上善寺にて三七日要集講談し申に、
両三度出御ならせ給ひ、
　たのもしや一なかれの法の水
　同し心にくむとおもへは
御詠哥にあつかりけるに、とりあへす、
おもひきや雲居の上の月かけを
　おなし御法の水にみんとは
いつわりなき人のなさけは、涙の色にあらはれ、
無人の面影をうつすかたみは、水茎の跡と
申ならはしたる事なれは、愁涙をおさへ、
愚筆をそめ侍る也。御一見の人は、
必十念にあつかるへき也。
文亀四甲子三月十七日盛全書之。
□㊀無阿弥陁佛十念。
」（15オ）

」（15ウ）

」（16オ）

」（16ウ）